

撰衆生の四三願(施為)：以下の通り。

凡夫所託(一六願)：第一―十一、十五、十六、二十一、

三十三、三十七願

「凡夫引接の願(四願)」：第十八、十九、二十、三十

五願

二乗所託(一願)：……第十四願

菩薩所託(一八願)：二十二―二十六、二十八―三十、三十

六、四十一―四十八願

未分類(四願)：……二十七、三十四、三十八、三十九願

良忠はこのように四十八願全体を把握しているが、第十八願を特に生因の願と呼称している。この例は『伝通記』中、処々に散見され、特に『観経疏』定善義、真身観所説の三縁釈の結文(『浄全』二、四九頁上)を解釈し、それを通じて良忠は、『無量寿経』に本願に誓われた生因の行は称名念仏のみであって、これが『無量寿経』全体を通じて強調されていることを願成就の文、三輩の各文、流通分を引いて主張し(『浄全』二、三五四頁下―三五五頁上)、『阿弥陀経』『観経』にも同様の意図があることを述べる。このように善導の説示を具体的に引証し、本願に誓われた実践行は第十八願に示される称名念仏であることを説明した。言い換えれば、これによって第十八願を生因の願つまりは「衆生が極楽に往生するための具体的な実践行を誓われた願」としてあらためて位置づけ、定義している。

また良忠は、『伝通記』において定散の行も「因縁和合して、皆、往生することを得」とし、「凡夫、報土に生ずる時、願力、加わらずんば生ずべからざるが故に、別して佛願を以て増上縁

と爲す」(『浄全』二、一二八頁下)とも述べ、凡入報土は願力の加被によって成立するものであることがわかるが、換言すれば良忠は「凡夫が定散の行(諸行)によって往生するためには阿弥陀仏の願力の加被が必要である」と述べていることになる。では念仏以外の行に加被し、諸行によって報土に往生さしめる願力とは何か。この問題に対して良忠は撰機の願を提示する。良忠は、撰機の願は機根を撰取することを意図した願であるため行は成就し難く、それに対し生因の願は機根の隔てなく、往生するための行が示された願であるから行は成就し易いとしている。そして行者の行が成就するのは仏果の冥加を被るものであるとして、それぞれの行者の行が被る仏の冥加と願力について述べ、称名は仏の冥加、撰凡の願、生因の願の力を被ることに他の行に超えているとしている(『浄全』二、二一一頁上―二一二頁下)。これらの説示を終わって、良忠は『観経疏』の解釈に返り、「五乗、齊しく入る」のために正しく託した「仏願」は生因の願にかぎったものではなく、機根の撰取を目的としての仏願(四十八願全体)を表したものと解釈したものである。

日蓮研究に関する方法論上の再検討

——実証主義の持つ限界——

一 問題の所在

第二次世界大戦後二〇年間余、宗教学での日蓮研究は神道研究と並んでパージの対象となり、歴史的研究ないしは思想的

笠井 正弘

研究に限定され、アカデミックな教義研究に関しては、立正大学・身延山大学に限定されて、宗教学では久しく研究されてこなかった。それは日蓮研究の低調さの原因の一つとなっているとともに、日蓮の宗教性理解に決定的限界を与えることにもなってきた。

二 キリスト者による日蓮の宗教的価値の発見

明治維新以後、廃仏毀釈運動の影響もあって日蓮系仏教教団は極めて不調であったが、明治三〇年代になるとキリスト者達によって、日蓮が見直され、それに触発されて活発な日蓮研究が開花するようになった。その典型が無教会主義キリスト教の提唱者、内村鑑三である。彼の『代表的日本人』で捉えられた日蓮像は、宗教学という視点からは、重要な内容を含んでいる。この作品で彼は五人の人物を選んでいるが、仏教僧からは、数多い歴史上の仏教僧を差し置いて日蓮のみを選んでいる。内村は日蓮を日本人にとって‘enigmatic’ (謎) の存在、あるいは「日本人に最も誤解されている人物だ」、と述べている。それは彼が日蓮に古代ユダヤ・キリスト教的〈使命預言者〉の姿を見たからであった。内村は上記の作品の最後に、日蓮を「最も誠実で最も正直な人物だ」と評価している。これは、哲学系の思想史の立場から、戦後すぐの家永三郎氏や一九六〇年代の戸頃重基氏らが日蓮を法然の亜流とみなし、なおかつ僧侶を殺せと述べるなど、倫理性に問題があると述べていたのとは対照的である。ここには、単に社会的行為規範に過ぎない倫理という対象を實體視する、ナイーブな方法上の欠陥が露呈している。内村は海外のキリスト教に接したおかげで、意識せず

に〈異文化比較〉という視点が確立し、自文化が相対化できたと云えよう。その結果従来の日本人が理解できなかった日蓮の宗教性の特徴を把握できたのであった。日蓮を知るとは、内村のいわゆる‘enigmatic’ (謎) な部分を把握することである。

三 方法論の吟味—実証主義の持つ限界

第二次世界大戦後、日蓮教学研究は歴史学、思想史学優位の影響で自由度が失われている感がある。何よりも史学系は実証主義を方法の基本としているが、そこでは根拠のない〈進化幻想〉と過去の出来事と現在を時間軸で繋ぐ〈実体的因果論〉を方法として使っているのが、科学的方法として破たんしており、その結果教学へ応用しても硬直化を免れ得ない。この時に参考になるのはマックス・ヴェーバーの実証主義歴史学への批判である。彼は〈理念型〉を方法として確立したが、〈預言者の宗教類型〉分析を提示して古代ユダヤ教→プロテスタントキリスト教の特徴としての〈使命的預言者〉の宗教的個性を明確化している。日蓮に色濃く観察されるのはまさにこの個性である。これを捉えるには実証主義法でも理念型法でもなく、宗教の全体性を構築し、そこから測定して個性を同定する方法が必要である。それは数学が虚数が必要としているように、いわば〈虚証主義〉法を必要としているといえよう。日蓮教学は虚の重要性に根差したこの絶対開会的全体性へと飛翔するとき、人類全体へのメッセージを発信できるようになるであろう。